

67
3
64

東泉圖書齋

三冊	六四號	三架	六七函	屬類
----	-----	----	-----	----

海石義烈傳

菊池先生評閱
土居通豫編輯

三篇

三溪菊池先生評閱
香國土居通豫編輯



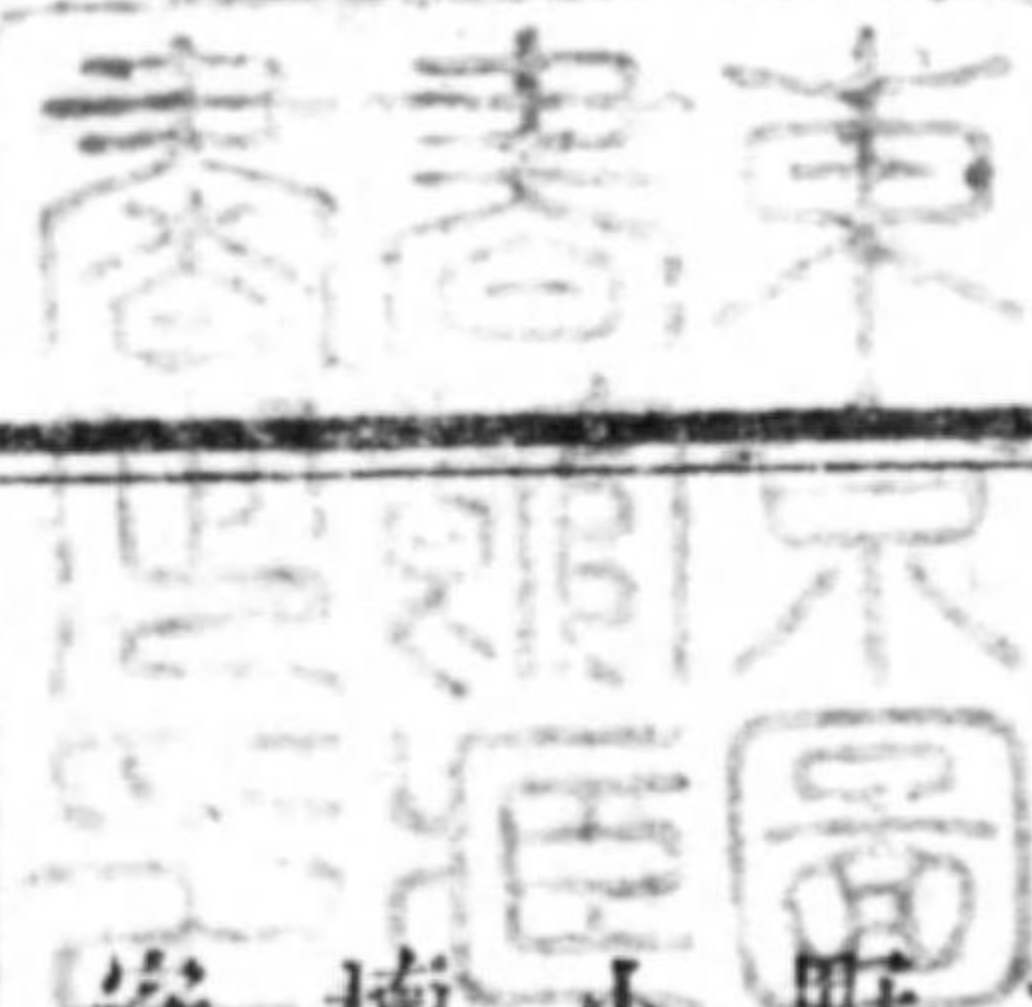
海内義烈傳

三編

明治十五年
二月新刻
花明柳暗舍藏

海南義烈傳三篇目次

安岡安平	楠目藤盛	小畑正路	野老山輝朝	大利正樹	那須重住	田内茂稔	久松重和	岡田宜振	山内豐譽
官地正寬	山本正胤	桑原政伸	石川真義	安藤正勝	那須重民	田所恒誠	村田克昌	岡本正明	島村重險



海南義烈傳三篇目次

安岡安平	楠目藤盛	小畑正路	野老山輝朝	大和正樹	那須重住	田內茂稔	久松重和	岡田宜振	山內豐譽
------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------

官地正寬	山本正胤	桑原政伸	石川真義	安藤正勝	那須重民	田所恒誠	村田克昌	岡本正明	島村重險
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------



三溪菊池先生許閱
香國土居道聚編輯



海山幻義烈傳

明治十五年
一月新刊
花明柳暗令藏

小松樂成
清岡成章
安岡忠房
橫山正利
木下秀定
須賀義氏
豐永方銃
柏原義勝
近藤爲美
新井義正
檜垣正休

澤村 某
清岡正道
寺尾良利
小川好雄
木下彝正
柏原信郷
千屋孝樹
岡松正直
宮田節齋
田中維清
吉本元枝

宮地利涉
川島 某

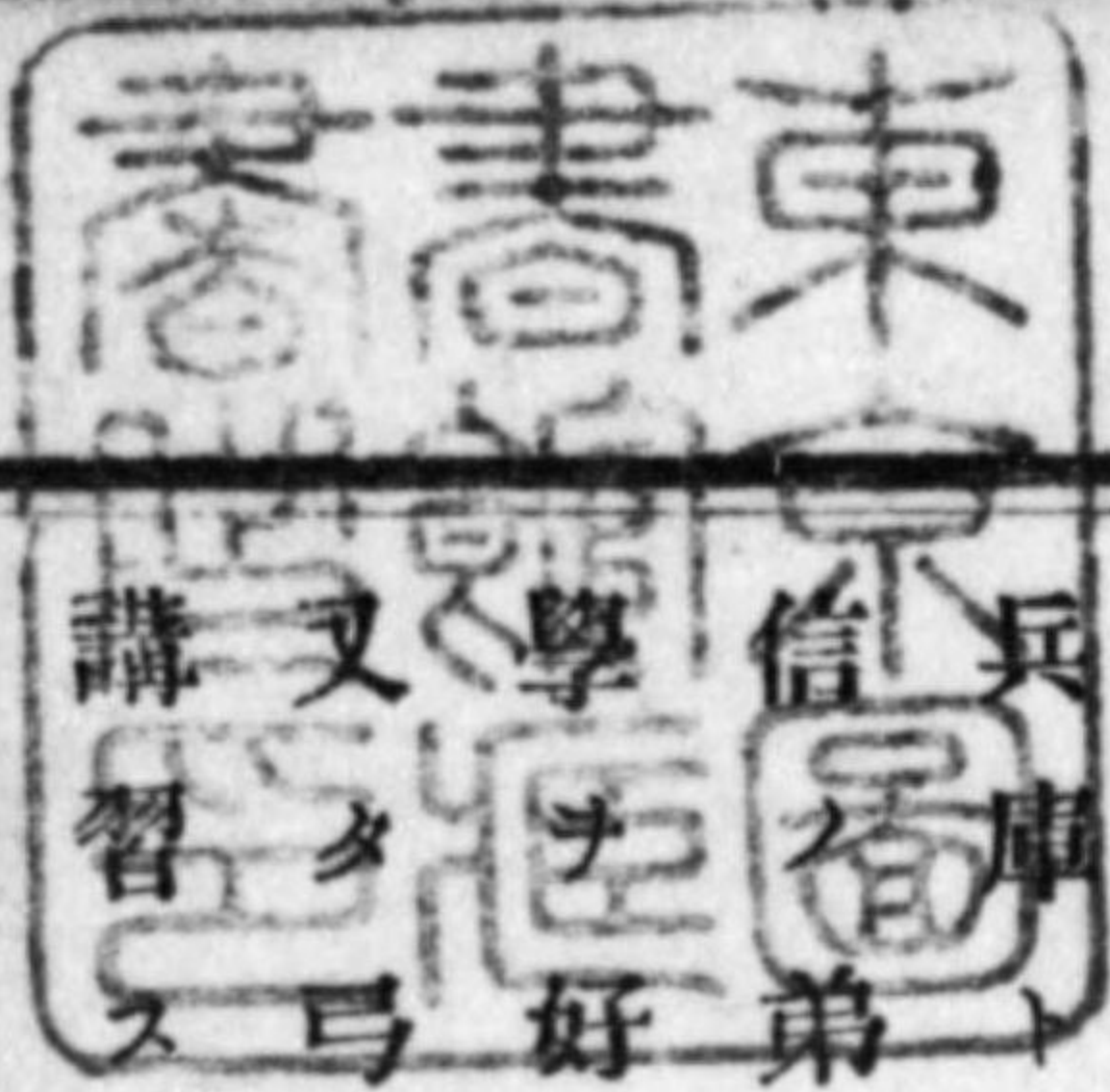
宮田能搭

海南義烈傳三篇

三溪菊池先生評閱
香國土居通豫編輯

山内豐譽

山内豐譽字ハ延年梅道ト号シ又々梅溪ト号シ
 別ニ鶴汀ト号ス幼名ハ鹿衛後チ民部ト改メ又
 稱ス山内豐著ノ七男ニシテ乃チ老侯豐
 兵庫トナリ豐譽人ト爲リ温ニシテ穎幼ヨリ文
 信番弟ナリ
 學ヲ好ミ篤學ノ士ヲ招キ日ニ經史ヲ講セシメ
 又々馬槍銃等ノ術ニ精キモノヲ引キ之レヲ
 講習ス
 文久元年辛酉伯父山内豐道ノ家ヲ繼キ



千五百石ヲ食ス恒ニ皇運ノ復セザルヲ憂ヒ
洋人ノ跋扈ヲ惡ミ慨然爲ス所アラント欲ス會
々武市小楯等累綫ノ阨ニ罹リ又々幾許モナク
清岡成章等二十三人野根山ニ屯集スルノユト
ル起豐譽頗ル見ル所アリ數々之レヲ當路者ニ
言ヒ傍ヲ人ヲシテ志士ノ心ヲ慰諭シ以テ暴烈
ノ所爲ヲカラシム而シテ附隸ノ良士ヲ撰ミ竊カ
ニ諸方ニ遣リ時事ヲ探偵セシメ其報知スル所
事ノ大ナル者ハ意見ヲ附シ其小ナル者モ殘ス
ナク悉ク之レヲ豐信ニ告ケ以テ翼賛ス然ルニ
當時事ヲ執ル者ト論議往々相協ハス故ヲ以テ

紫瀾云誰
想天空海
國之大議
論發千貴
公子之口
他日五條

大ニ平日ノ所見ヲ陳ヘ豐信ニ質ス其略ニ曰ク
天下憂國ノ士口ヲ緘テ言ハザルニ至ルハ誠ニ
懼ルベキナリ朝廷幕府公卿諸侯ノ其心ヲ異ニ
スルハ誠ニ懼ルヘキナリソレ此ノ二懼ハ我國
ノ大患ニシテ外人ノ大幸ナリ嗚呼時運ヲシテ
此ハ極ニ陷ラシムルハ其責果シテ誰ニカ歸セ
ン既往ノ事ヲ舉テ今日之ヲ是非スルモ亦タ
何ハ益アラハ今國家ノ爲メニ謀ル他ナシ唯速
ニ大活眼ヲ開キ大英斷ヲ決シ天下億兆ノ民ト
俱ニ心ヲ一ニシシ力ヲ協セ公明正大ノ道理ニ基
キ万世ニ互テ耻ヂズ万国ニ臨テ愧チザルノ大

聖誓亦不
外此也。

基礎ヲ確起スルニ在ルノミト而シテ奈何セシ豺
狼路ニ横ハリ奸計百出遂ニ兄弟相口會スルヲ
得サルニ至ル是ニ於テ豐譽深ク覺悟スル所ア
リ復タ敢テ時事ヲ口ニセス詩酒以テ自ラ消遣
ス偶々其事ノ告ケサルヲ得サルアルニ方リテ
ハ深夜微行シテ豐信ノ寐室ヲ訪フト云フ然ル
ニ積鬱ノ憂愁遂ニ病ヲ醸シ百療効ナク慶應三
年丁卯二月廿日終ニ世ニ即ク嗚呼惜ヒ哉享年
二十七湖江山先塋ノ側ニ葬ル覺道院寛山全量
ト法謚ス

思昔遊

寂々秋風拂面涼。曲欄干外已昏黃。昔遊不信當
年事。孤鶴揚州夢一場。

山房秋夜

山光知幾更。孤枕醉眠輕。青燭微々照。哀蟲唧々
鳴。秋風搖感意。夜雨打愁情。一夢須臾破。只聞礪
水聲。

嶋村重險

嶋村重險初メ八次郎ト稱シ後テ衛吉ト改ム藩
士壬生平ノ次男也人ト爲リ勇決ニシテ義ヲ重
ニス初メ刀法ヲ全藩士麻田勘七ニ槍術ヲ土方
逸右衛門ニ銃法ヲ伊藤俊吉ニ射術ヲ津田右金

吾ニ經書ヲ德永達助ニ學ヒ皆ナ得ル所アリ後
ナ江戸ニ遊ヒ千葉氏ノ門ニ入り專心刀法ヲ練
磨シ其蓋奧ヲ極ム嘉永七年甲寅國ニ歸ル安政
三年丙辰藩廳ニ請ヒ全志ノ士ト力ヲ協セ自ラ
行テ千葉一胤氏ヲ國ニ聘シ以テ諸士ヲシテ其
業ヲ受ケシム蓋シ我土佐ノ大ニ刀法ニ長スル
モノアルハ實ニ重險ノ力居多ナリトス後ナ又
タ江戸ニ遊ヒ桃井春藏ノ塾ニ入り明智流刀法
ヲ學ヒ盡ク其印可ヲ受ク嘗テ師ニ代テ佐倉藩
ニ至リ其法ヲ傳フト云フ文久元年辛酉再ヒ國
ヲ辭シ諸州ヲ經歷シ其伎倆ヲ試ミ回テ江戸ニ

抵ル此ノ時ニ方リテ幕政御チ失シ天下騷然重
險慷慨激昂全藩ノ士武市小楯等ト謀リ薩長水
有志ノ諸士ト戮力協心大ニ尊攘ノ義ヲ唱フ此
歲十月小楯等ト全シク國ニ歸リ時弊ヲ藩廳ニ
言フ未タ輒ク用ヒラレス文久二年壬戌藩主山
内豐範ノ勅ヲ奉レテ京師ニ入ルニ隨フ同十月
三條姉小路兩卿勅使ノ詔ヲ奉シ東下スルニ及
シテ三條卿藩主ニ請テ重險ヲ從フ十二月從テ
京師ニ還ル卿記章ノ禮服一襲ヲ賜ヒ以テ勞ス
此月藩主豐範ニ從テ國ニ歸ル更ニ小楯等ト全
シク藩廳ニ建言スル所アリ用テレズ文久三年

紫瀾云重
險嘗與河
野敏鎌爲
刻頸交同
時下獄而
幽明永訣
一上青雲
一歸黃土
嗚呼亦有
命而然者
耶。

癸亥九月廿日藩竟ニ重險等ヲ惡ミ獄ニ下ス是ヨリ數々鞠訊セラレト雖モ重險復タ言ハス終ニ榜問ノ爲メニ血ヲ嘔テ死ス年三十二實ニ慶應元年乙丑三月廿三日ナリ遺骸ヲ家ニ賜フ之レヲ香美郡下嶋村ニ葬ル重儉傍ヲ國雅ヲ能クス其人ヲ感動セシムルモノ極メテ多シ

更衣

オホカタノ人ノ袂ハカハレトモ我ヌレ衣ゾ
ヌクヨシノナキ、

五月雨ノユロ

思フ事マスタノ池ノ花アヤメ、アヤメモワカ

又五月雨ノユロ、

夏月

明ヤスキ夜ヲウラミシモ中々ニ、今ハアタナル夏ノ夜ノ月、

述懷二首

イタツラニアハレユトシモクレニケリ、トツル氷ノオモロトケステ、
露ノ身ハヨシヤキユトモ君ノ爲、思フユ、口ノ消ナマシヤハ、

岡田宜振
久松重和

岡本正明
村田克昌

田内茂稔

岡田宜振通稱ハ以藏藩ノ郷士ナリ天保九年戊戌正月廿日ヲ以テ土佐郡江ノ口村ニ生ル天資強剛好テ武技ヲ善クス安政三年丙辰某月藩其技術ヲ賞シ金若干ヲ賜フ是歲九月江戸ニ遊ヒ某氏ノ門ニ入り業大ニ進ム後テ國ニ歸リ幾許モナク又々中國九州ヲ歴遊シ暫ク足ヲ豊後國岡藩ニ止メ再ヒ江戸ニ入ル其際交ル處皆ナ當時ノ名流ナリ文久二年壬戌藩主山内氏ニ扈シ京師ニ上ル途大坂ニ滯ス藩ノ輕士井上左市郎ナル者アリ節義ヲ重スルノ輩等其奸惡ニシテ

蠹害ヲ逞フセシユトナ慮リ屢々之レヲ除カンユトナ謀ル事未タ輒ク成ラズ藩士平井義比弘瀬年定等頗ル之レヲ慨シ策ヲ宜振及岡本正明村田克昌久松重和等ニ授ク宜振又々之レヲ田内茂稔ニ告ケ相俱ニ謀ル所アリ全年八月二日ノ夜左市郎ヲ蹤跡シテ酒樓大興ニ至ル至レハ則チ克昌重和等既ニ坐ニアリ正明モ亦タ繼テ至ル肴核滿盤觴飛ヒ酒巡ル少焉ニシテ來テ宜振ヲ訪フモノアリ出テ之レヲ見レハ義比等松山某ヲシテ事ヲ舉クルノ地ヲ問ハシムルナリ乃チ期スルニ九郎右衛門町ノ河岸ヲ以テス坐

二歸レハ左市郎モ又々諸士ト團樂歡笑互ニ酔
フ是ニ於テ相携テ樓ヲ下リ途某妓樓ニ投シ更
ニ一酌ヲ催フス茂稔モ亦々至ル之レヲ久シテ
夜既ニ四鼓六人徐々トシテ出テ九郎右衛門町
ヲ過ク松山某清岡正道等兩三輩陰現前後ヲ擁
護ス正明重和等物ヲ途ニ遺シ物色レテ未々至
ラス宜振進テ克昌茂稔ト俱ニ左市郎ヲ捉ヘ終
ニ暗中ニ縊殺シ蹴テ河中ニ投シ溺者ノ狀ノ如
クス後々京師ニ在リ諸全志ト供ニ本間精一郎
及ヒ渡邊金三郎大川原十藏森孫六等ノ奸謀ア
ルヲ憂ヒ又々竊カニ之レヲ刺殺スト云フ明年

癸亥九月藩邸ヲ脱シ姓名ヲ變シ各所ニ往來シ
力ヲ國事ニ竭クス忽チ捕ヘラレテ京師ノ獄ニ
繋カレ黥シテ放タル幾許モナク事發覺シ藩獄
ノ中ニ斬ラル年二十八
岡本正明通稱ハ次郎藩士中島和七ノ次男ニシ
テ岡本某ニ養ハル依テ其姓ヲ冒ス仕テ山内氏
ノ徒士ト爲ル中頃失アリ職ヲ褫ハル後々數々
用ヒラレ終ニ本職ニ復ス宜振等左市郎ヲ殺害
スルノ事ニ與ル慶應元年乙丑閏五月十一日同
シク刑死ス年三十四
久松重和モ亦義士ナリ通稱ハ喜代馬姓ハ橘氏

藩士四次ノ三男ナリ少フシテ擊劍ヲ好ミ藩人
淺田某ニ隨テ其業ヲ受ク某歲江戸ニ遊ヒ千葉
氏ノ門ニ入り益々練達シ歸テ淺田氏ノ印可ヲ
受ク是ニ於テ一家ヲ爲シ場ヲ自邸ニ開キ其術
ヲ授ク來リ學フ者無慮數百人後々再ヒ江戸ニ
至リ千葉桃井氏等ノ門ニ出入シ又々去テ九州
ヲ歷遊シテ歸ル藩命シテ擊劍ヲ教導セシム文
久二年壬戌六月藩主ニ扈シテ京ニ上ル幾許モ
ナク命セラレテ三條卿ニ奉仕ス十月卿ニ從テ
東下シ十二月京ニ從歸ス卿徽章ノ禮服ヲ賜ヒ
以テ其勞ニ酬ス重和感激愈奮勵ス此月藩主ニ

扈シテ國ニ歸ル左市郎ヲ殺害スルニ與ルノ事
發覺シ宜振等ト同シク獄中ニ斬首セララル時ニ
年三十二
村田克昌忠三郎ト稱ス藩士植造ノ次男母ハ足
達氏曾テ江戸ニ遊ヒ武技ヲ千葉氏ニ文學ヲ藤
森氏ニ學フ文久二年壬戌八月大坂ニ在リ宜振
等ト相謀リ左市郎ヲ除ク同十月幕政更革ニ際
シ議論百出人心洶々如ナリ老侯時ニ江戸ニア
リ克昌等頗ル之レヲ危ム遂ニ同志ト俱ニ藩廳
ニ請ヒ自費ヲ抛テ警衛ニ赴ク侯克昌ノ才ヲ愛
シ擢テ、陝近セシメ屢々物ヲ賜フ明年癸亥侯

ニ扈シテ京ニ上ル此年五月國ニ歸リ職ヲ解カ
ル元治甲子八月十三日時事ニ關スルト云フヲ
以テ捕ヘテ獄ニ下サル後ナ宜振等ト同シク刑
ニ就ク年二十六
田内茂稔初ノ名ハ喜多治後ナ衛吉ト改ム藩士
武市半右衛門ノ次男ニシテ田内喜參次ノ養子
ト爲リ其後ナ襲ク文久二年壬戌遊學ヲ以テ名
トシ國ヲ去テ四方ニ周流シ頗ル國事ニ盡カス
後ナ克昌等ト俱ニ江戸ニ至リ老候ナ警衛シ傍
ヲ實兄武市小楯等ト俱ニ周旋ス文久三年癸亥
正月十三日國ニ歸ル幾許モナク捕ヘテ獄ニ下

サル元治元年甲子十一月廿八日痛楚ノ爲メニ
獄中ニ斃ル年三十

野時雨

旅人ノ行果又間ニ幾度カ、時雨フリタル武藏
野ノ原、

千鳥

更ケ行ケハナチニ鳴音モ近カツキテ、
モヨホス早夜千鳥カナ、

田所恒誠

藩士田所恒誠ハ幼名ヲ疇太郎後ナ壯輔ト改ム
寧親ノ次男ナリ家世々破術ヲ傳フ恒誠其術ヲ

好ミ父ニ從テ業ヲ受テ長スルニ及テ江戸ニ行
キ勝隣太郎ノ門ニ入り其術ヲ研磨スルコト殆
シト五年強業大ニ進ム文久二年壬戌家ニ還ル
是ヨリ先キ外客ノ我國ニ入りシヨリ來テ國事
多端ニシテ幕政振ハス是ニ於テ勤王ノ論彭張
シ有志ノ士慷慨ス恒誠モ亦テ措ク能ハス遂ニ
脱奔長門ニ入ル藩其罪ヲ惡ミ祿ヲ褫フ後テ周
防ニ在リ全志ノ士ト國事ヲ痛論シ議諸ハス憤
懣ノ餘リ招賢閣中ニ於テ自屠スト云フ或ハ云
フ恒誠過失アリ全志ノ擯斥スル所トナリ旅舍
ニ在テ殺サルト未タ孰レカ是ナルヲ知ラス死

スル年二十五

那須重住

那須重民

那須重住ハ俊平ト稱ス姓ハ藤原氏高岡郡禰原
村ノ人坂本代吾ノ長男ニシテ藩ノ郷士那須忠
篤ノ養フ所ト爲ル居常勤王ノ志ニ厚シ文久三
年癸亥六月六日ノ夜終ニ家ヲ脱シテ長州ニ之
キ忠勇隊ニ入ル此月十六日福原越後ニ隨テ纜
ヲ三田尻ニ解キ京ニ上ル廿六日山崎ニ滯シ寶
寺ニ移リ其隊ヲ分テ天王山ニ置テ重住隊中ニ
在リ七月十八日ノ夜京師ニ進ミ其明十九日大
ニ會兵ト戦フ利アラズ遂ニ敵刃ニ墮ル年五十

八

重民ハ重住ノ養子實ハ高岡郡佐川村ノ人濱田宅左衛門ノ二男ナリ性剛義勤王ノ大志ヲ發シ碌々以テ徒過ス可カラズト爲シ文久二年壬戌四月家ヲ脱シ四方ニ往來シ節義ノ人士ト交ル後チ大和ノ役吉村重郷等ト俱ニ天忠組ニ在リ苦戰敵兵ヲ防シ終ニ其支ユ可カラサルヲ知リ縱橫亂戰重傷ヲ被テ死ス時ニ年三十五

大利正樹

大利鼎吉諱ハ正樹父ハ達吾藩士大利菅山ノ族ナリ文久二年壬戌老侯豐信江戸ニ滯ス當時天

下驥擾寄禍ノ候ノ身ニ及ハンユトヲ憂懼シ柳井友政等ト謀リ藩ノ允可ヲ受ケ私財ヲ擲テ江戸ニ抵リ晝夜護衛ヲ怠ラス所謂五十人組ノ一人ナリ明年癸亥正月豐信ニ扈從シ京師ニ上リ監察ノ属官ト爲ル四月又扈從シテ國ニ歸リ官ヲ罷メラル十月遂ニ國ヲ脱シ京師ニ奔ル元治元年甲子ノ亂長兵ニ加ハリ會桑ノ兵ト戰フ軍敗レ退テ長州ニ入ル其歲十月航シテ大坂ニ萃ル遂ニ壬生浪士ノ爲メニ殺害セラル實ニ慶應元年乙丑正月八日ナリ死スル年二十四

國ヲ出ツルトキ咏メル

君カタメ都ノ空ニイソカレテ、ヤスラニユエ
ム八重ノ山路モ、

湊川ニテ

橋ノ薫リ流セルミナト川、水ハナケレト袖ハ
メレケリ、

迷 懷

君カ爲メ盡ス心ノ甲斐ナクテ、過ニシ友ニ言
ノ葉モナシ、

故里ニ送ル文ノ中ニ

アスヤケフトオモヘハイト、悲シクテ、ナミ
ダニツ、ム雁ノ玉ツサ、

辭 世

塵ヨリモ輕キ身ナレト大君ノ、深キ惠ニケフ
報フナリ、

安藤正勝

安藤正勝ハ鎌治ト稱ス山内氏ノ輕士ナリ父慶
八ノ二男天保十三年壬寅三月ヲ以テ土佐郡久
万村ニ生ル人ト爲リ勇悍ニシテ狷介京師河原
町ノ藩邸ニ在勤シ勤王ノ儕輩ト相結フ偶々同
志八人計リ三條橋邊ニ散歩シ長藩賊徒云々ノ
揭示札ヲ視テ大ニ怒リ之レヲ擊碎ス番卒襲來
ル正勝激闘重傷ヲ負ヒ退テ藩邸ニ還ル自ラ生

クヘカラサルヲ知り其明日腹ヲ割テ死ス年二十五時ニ慶應三年丙寅九月十三日ナリ骨ヲ東山ニ葬ル

野老山輝朝

文久元治ノ際心ヲ國事ニ注キ四方ニ往來スルモノ概チ姓名ヲ變シ以テ蹤跡ヲ晦ス輝朝通稱ハ五吉郎藩士山野邊壽滿平ノ次男ニシテ仕テ藩ノ輕士トナル後チ命セラレテ京師河原町ノ邸ヲ警衛ス而シテ傍ヲ諸藩ノ俊傑ト交ル即チ姓名ヲ變シテ所山五六郎ト稱ス甲子ノ六月六日同志ト三條街小橋傍池田屋某ノ家ニ會シ時事

ヲ商議ス會津彦根ノ士等數十人以テ無賴ノ輩事ヲ謀ルト爲シ劍ヲ閃シ槍ヲ揮ヒ忽チ輝朝等ヲ圍ム衆憤然起テ圍ヲ輝朝擊テ數人ヲ斃シ一條ノ血路ヲ闢キ逃テ長藩ノ邸ニ入り終ニ重傷ノ爲メニ死ス時ニ年十九東山正法寺ニ葬ル

石川眞義

石川眞義通稱ハ潤次郎人ト爲リ勇武絶倫亦勤王ノ壯士ナリ家世々藩ノ輕士祖父ヲ榮吉ト曰ヒ父ヲ音作ト曰フ元治甲子藩命シテ眞義ヲシテ三條氏別殿黒谷ノ邸ニ奉仕セシム此歲六月六日會津彦根ノ士等我藩ノ士野老山輝朝等ヲ

以テ無頼ノ輩事ヲ謀ルト爲シ三條街小橋傍ノ池田屋ニ圍ム真義輝朗等ノ會ニ後レ至ル正ニ是レ劍光電ヲ飛シ喊聲雷ヲ轟スノ時會彦ノ士等真義ノ後ヨリ至ルヲ認メ刃ヲ反シテ進ム真義叱咤大刀ヲ揮テ拒キ戰フ斫テ數人ヲ斃シ終ニ敵刃ニ死ス或ハ云フ真義ハ此時ニ死セスト未タ何レカ是ナレヲ知ラス時ニ年二十九

小畑正路

小畑正路俗稱ハ孫三郎土佐郡ノ平民美穗ノ三男ナリ母ハ横田氏正路夙ニ尊攘ノ議ヲ唱エ大ニ國歩ノ艱難ヲ憂フ文久二年壬戌藩ノ命ニ因

リ京攝ノ間ニ往來シ時情ヲ探偵ス而シテ諸藩有志ノ士輩ニ交リ且ツ英名アル縉紳ノ門ニ出入シ藩士武市小楯ト協力シ我藩ヲシテ尊攘ノ首唱メラシメント周旋甚タカム同三年癸亥春藩命シテ三條氏ニ警衛メラシム其夏國ニ歸リ益々尊攘ノ大義ヲ辨述シ闔藩ノ士氣ヲ鼓舞ス又同士嶋村重險等ト同シテ藩廳ニ獻言シ速ニ人オヲ登庸シ以テ藩政ヲ釐革シ大令ヲ煥發シ以テ攘夷ノ實効ヲ奏シ而シテ親兵數百ヲ上テ輦下ヲ護衛セシユトヲ言フ言極テ剴切而シテ遂ニ之レヲ以テ禍ヲ買フ其歲九月小楯等ト俱ニ獄ニ

繫カル元治元年甲子四月初ヲ審問ヲ受ク後ナ
數々審問ニ逢フモ獄竟ニ成ラス明年乙丑五月
小楯ニ死ヲ賜フ此ノ日正路モ亦々永牢ノ命ア
リ慶應二年丙寅九月廿一日病テ獄中ニ没ス年
三十或ハ云フ獄吏其剛強ヲ惡ミ窺カニ之レヲ
毒スト未々果シテ信ナルヤ否ヤヲ知ラス

桑原政伸

桑原政伸通稱ハ義之助其姓ハ菅原氏幡多郡楠
島村ノ郷士禮作ノ長男ナリ禮作己レノ弟禮次
ヲ以テ養子トナシ家ヲ讓ル禮次又々政伸ヲ養
子ト爲ス政伸人ト爲リ温厚ニシテ勇武慶應二

年丙寅ノ冬奮然身ヲ以テ國事ニ委セント欲シ
國ヲ脱シテ長州ニ往キ七卿ヲ護衛ス後ナ遊撃
隊ニ加ハリ砲隊ニ列ス明年丁卯病ニ罹リ防州
山口病院ニ在リ終ニ起タス時ニ年二十五

楠目藤盛

楠目藤盛清馬ト稱ス父ハ民助天保十三年壬寅
八月土佐郡潮江村ニ生ル文久三年癸亥五月國
ヲ辭シテ京師ニ遊學シ諸藩勤王ノ士輩ト相交
リ國事ニ尽瘁ス八月大和ノ役起ル藤盛天忠組
ニアリ苦戦利アラス鋒刃ノ下ニ死ス幕兵其頭
ヲ斬リ京師ノ刑場ニ埋ム後ナ兄正幹 朝廷ニ

請ヒ鴨東鷺尾山ニ改葬スト云フ死スル年二十
二

山本正胤

山本正胤字ハ士介始メ兼馬ト稱シ後チ忠亮ト
改ム藩士順吉ノ長男ナリ幼ヨリ學ヲ好ミ志守
端直人ト校セス夙ニ王室ノ式微ヲ慨シ常ニ文
天祥ノ人ト爲リヲ慕フ曰ク男兒ハ當サニ斯ク
ノ如クナルベキ耳ト文久三年癸亥ノ五月機夷
ノ勅下ル中外翕然望ヲ中興ニ属ス而シテ正胤適
々藩命ヲ奉シ入テ三條卿ヲ衛ル幾モナク七卿
長州ニ遷ルノ變アリ乙丑某月又々筑ノ太宰府

先生云與
前酒色云
々反映叙
事詳悉尤
見筆力

ニ遷ル前後并ニ隨フ正胤西下ノ後特ニ酒色ヲ
絶チ鞠躬盡瘁未タ嘗テ困辱ヲ以テ其節ヲ屈セ
ス既ニシテ不幸ニシテ病ニ罹リ數旬愈篤シ自
ラ其起サルヲ知り乃チ其朋友ヲ招キ語テ曰ク
吾一朝病ニ罹リ殆ント將サニ起ザラントス嗚
呼病蓐ハ上ニ斃ルハ豈ニ我レハ素志ナラシヤ
夫ハ酒色ヲ絶ツモハハ特ニ待ツ所アツテ然ル
ナリ今復タ何チカ待シ只恨ム公ハ東駕ヲ見ル
ニ及ハサルユトチ吾死シテ餘罪アリ葬事ハ務
メテ儉薄ヲ要スベシト即チ杯ヲ引テ訣飲シ從
容刃ニ伏シテ死ス一坐爲メニ慟哭ス卿モ亦タ

大ニ痛惜シ挽歌及金帛等ヲ賜フ而シ他ノ公卿
ノ賜フ所モ亦々多シ賻合以テ之レヲ執行嶺ニ
葬ルト云フ實ニ慶應二年丙寅五月九日ナリ享
年二十五

辭世

一死雖輕義不輕。從容易質豈吾情。平生餘罪何
時盡。願學七生致至誠。

ハナチナシリウキナシルタモ武士ノ道ニ違ハ
ヌ心ナリケリ、

安岡安平

安平ハ慷慨憂國ノ士ナリ通稱ハ勘馬藩士政直

ノ長男文久三年癸亥舉ケラレテ輕士ト爲ル是
歳能勢成章等ト蝦夷ニ遊フ後チ京師ノ邸ニ勤
仕シ傍ラ奇節ノ士ト交リ頗ル時事ニ周旋ス遂
ニ脫奔シテ中國九州ヲ經歷シ益々同志ト相結
フ而シ天下ノ形勢日ニ變遷シ慷慨悲傷自ラ抑
ユル能ハス元治元年甲子三月京師ニ在リ憤然
四條磧ニ至リ自屠シテ死ス骨ヲ西道寺ニ葬ル
時ニ年二十二

宮地正寬

宮地正寬初メ文三郎ト稱シ後チ宜藏ト改ム姓
ハ藤原氏父ハ覺兵衛正寬天保九年戊戌十月十

二日ヲ以テ高岡郡能津村ニ生ル人ト爲リ勇幹
ニシテ質直一目ヲ眇ス居常勤王ノ志ニ厚ク藩
人吉村重郷等ト友トシ善シ文久二年壬戌三月
重郷ト俱ニ國ヲ脱シ京攝ノ間ニ往來シ以テ諸
藩ノ義徒ヲ鼓舞ス此歲五月捕ヘラレテ重郷ト
同シク本國ニ檻致セラル冬ニ至リ赦ニ逢フテ
免ス元治元年甲子正月藩命ヲ以テ京師ニ入ル
四月三條姉小路兩卿ニ從ヒ行幸ノ儀衛ニ列シ
大小刀烏帽等ヲ賜フ同年七月三條卿ヲ衛ス廿
七日偶々衛畢リ將サニ退宿セントス途ニ病ニ
罹リ其明終ニ絶ス聞ク者之レヲ痛惜セサルナ

シ時ニ年二十六

小松樂成

小松樂成通稱ハ小太郎香美郡片地村ノ人ナリ
其先ハ韭生小松ノ黨ヨリ出ツ平チ氏トス家世
農ヲ業トス樂成幼ニシテ穎敏嶄然頭角ヲ露ハ
ス里人目シテ神童トナス父菊右衛門鍛冶ヲ巧
ニシ能ク西洋ノ銃器ヲ製ス故チ以テ藩ノ中老
山内某ノ招ク所ト爲リ居チ長岡郡比江村某ノ
別墅ニ移ス樂成時ニ年甫メテ十二勃然雄飛ノ
志ヲ起シ心ヲ潛メテ書ヲ讀ム未タ數年ナラズ
某ノ本邸高知ニ移ル是ニ於テ文武ノ師ニ乏カ

ヲズ岩崎千里西内成器ニ從テ經史ヲ講究シ本
山某千頭某等ニ從テ擊劍搏擊手裡劍等ノ術ヲ
習練シ業先輩ニ超ユ樂成受性强勇ニシテ態度
瀟洒忠孝節義ノ事ヲ聞ク未タ曾テ感涙潸然タ
ラサルハアラス嘗テ 皇家ノ式微ヲ傷ミ深ク
外人ノ侵欲ヲ惡ム日ク我儕方サニ身軀ヲ擲テ
國家ヲ維持スベキノ秋ナリト依テ同志ノ志ト
交ヲ締シ大ニ敵愾ノ氣ヲ鼓舞振作ス而シ尊攘
ノコトハ遂ニ當時ノ輿論ニ歸シ朝議將サニ外
攘ニ決セントス有志ノ士輩等踊躍抃舞以テ時
機ノ至ルヲ俟ツ樂成是ニ於テ決然輦下ニ至リ

平生ノ志ヲ遂ケント欲シ事ヲ父母ニ白ス父母
樂成ノ心ヲ察シ愛憐ノ情切ナリト雖モ以テ停
繫スベキノアラス忍テ之ヲ許ス樂成感喜乃チ
山内氏ニ至リ暇ヲ請フ父子俱ニ斥ケラル遂ニ
同志北添正信森下茂時能勢成章安岡安平等ト
相ヒ携ヘテ國ヲ辭ス時ニ文久三年癸亥二月ナ
リ京ニ在テ汎ク諸藩ノ俊傑ト交リ益々持論ヲ
擴張ス此歲四月德川氏闕ニ詣リ而シ攘夷ノ期
決ス樂成奮然同行ノ士北添正信等四人ト謀リ
箱館蝦夷ノ地形ヲ實檢シ以テ海防ノ策ヲ立テ
ノト欲ス乃チ五月二日ヲ以テ京ヲ發シ嶮ヲ冒

先生云名
父之門必
有肖子予
於小松氏
亦言道焉

シ危ヲ蹈ミ越ノ敦賀ヨリ航シテ奥ノ鱒澤ニ至
リ泊ス舟中疫疾ニ罹リ箱館ニ上陸シ病ヲ養フ
不幸醫藥ノ効ヲ見ス終ニ客途ニ死ス同行ノ士
等悲慟一臂ヲ斷スルノ思ヲナスモ亦々遂ニ如
何能スベカラス相口謀リ尻澤ノ地藏山ニ葬リ
碑ヲ建テ、以テ其姓名ヲ表スト云フ死スル年
二十一實ニ其歲六月七日ナリ父母樂成ノ計ヲ
聞キ敢テ甚々悲傷セス人ニ語テ曰ク鞭テ以テ
義ニ赴カシムルモ猶ホ且ツ進マサルハ方今ハ
習俗ナリ然ルニ彼レ獨リ身軀ヲ擲テ國家ノ難
ニ趣カントス道ニ志スモハト云フベシ只其素

志ヲ達スルニ及ハサルヲ恨ムノミ彼モ亦々遺
憾ニ堪ヘサルヘシト聞ク者其篤志ニ服ス嗚呼
此ノ父母アリ而メ此子アリ惜哉天之レニ年ヲ
假サス其志ヲシテ空シク中道ニシテ廢セシム
ルヲ

澤村某

澤村某初メ愛之助ト稱シ宗之丞ト改ム父ハ禎
次藩士志賀某ノ臣ナリ文久元年辛酉主家ヲ辭
シ國事ニ奔走ス同二年壬戌三月遂ニ國ヲ脱シ
姓名ヲ改メ關雄之助ト稱シ海援隊ニ入ル後十
長崎ニ在リ會々事外艦ニ關涉シ頗ル紛議ヲ生

ス驥擾ニ際シ一士人アリ忽チ官門ニ入り護衛
ノ兵ヲ斫ラント欲ス某傍ラニ在リ事急ナリ短
銃ヲ放テ之レヲ斃ス會合ノ諸藩來テ之レヲ檢
ス薩藩ノ士等詰テ云フ是レ我藩ノ士ナリ何カ
故ニ之レヲ殺スト某曰ク曲直判然吾ニ於テ辨
論スル所アリト雖モ吾苟モ生ヲ欲スルモノニ
アラス一死以テ吾心ヲ明ニセシナリト遂ニ宿
所ニ歸リ從容腹ヲ屠テ死ス其常ニ曰ク人生孰
レカ死ナカラン其病蓐ノ上ニ衰死セシヨリハ
寧ロ腹ヲ割クノ潔然タルニシカスト其豪膽以
テ見ルベシ享年二十四時ニ慶應三年丁卯正月

十五日也

辭世

生テ世ニ殘ルトアシモ生テ世ニ、アラン限リ
ノ齡ナルヲメ、

清岡成章

清岡正道

安岡忠房

寺尾良利

横山正利

小川好雄

木下秀定

木下彞正

須賀義氏

柏原信郷

豐永方銃

千屋孝樹

柏原義勝

岡松正直

近藤爲義

宮田節齋

新井義正

田中維清

檜垣正休

吉本元枝

宮地利涉

宮田能格

川島 某

清岡成章通稱ハ道之助旭梅軒ト號ス姓ハ菅原

氏郷士又三郎ノ長男天保四年癸巳某月ヲ以テ

安藝郡田野浦ニ生ル成章幼ヨリ文武ノ業ヲ修

メ各々得ル所アリ嘉永六年癸丑外警ノ事起テ

ヨリ海内騷然而ノ國運ハ日ニ衰頹ノ勢ヲ顯ス

ヨリ憂國ノ至情益止ム能ハス屢々意見ヲ藩廳

ニ陳ス而ルニ中ユロ擁塞一モ用ヒラレズ是ニ

於テ遂ニ全志ノ士清岡正道、安岡忠房、寺尾良利、

横山正利、小川好雄、木下秀定、木下彞正、須賀義氏、

柏原信郷、豐永方銃、千屋孝樹、柏原義勝、岡松正直、

近藤爲美、宮田節齋、新井義正、田中維清、檜垣正休、

吉本元枝、宮地利涉、宮田能格、川嶋某等二十二人

ト俱ニ兵器ヲ携エ郡中野根山ニ屯集シ先ツ其

會合ノ事由ヲ藩廳ニ告ケ而シテ正道ト連署衆ニ

代リ更ニ書ヲ目附所ニ捧ケ時弊ヲ痛論ス其略

ニ曰ク伏シテ惟ミルニ方今諸侯國ニ就キ各藩

富强ノ基本ヲ起立シ尊攘ノ大義ヲ辨識シ皇

紫瀾云。携兵器三字。遂成二十。三義士之。獄。

威映發日ナ期セスシテ外人ヲ掃攘シ得ベキノ
 形勢ヲ成就セシモノハ抑モ先年來老侯ノ廟謨
 ニ苦慮セラレ而シテ主公ノ鞠躬竭盡セラレタル
 ニ因ルモノニアラスヤ然リ而シテ老侯ノ京師ニ
 在ルヤ鎮攘ノ論ヲ主張セラレ薩越ノ諸公ト相
 協ハス故キ以テ遂ニ還駕ヲ促セリト聞ク草莽
 ノ微臣等固ヨリ敢テ藩議ノ如何ヲ窺知スベキ
 ニ非スト雖モ老侯ニシテ誠ニ此高慮アリ還駕
 ノ後大令ノ發スル所必ス富强ノ基本ヲ確起シ
 海防ノ嚴備ヲ計畫シ他藩ノ如何ヲ顧ミス屹然
 獨立以テ鎮攘ノ主義ヲ擴張セラルベシト日夜

熱望ニ堪ヘサルナリ而シテ未タ海防警備ノ事
 ヲ聞カス未タ富强經營ノ事ヲ聞カス却テ外人
 ト交易ノ事アリト聞ク是ニ於テ乎士氣ハ益紛
 亂シ誹謗沸騰殆ント將サニ制止スベカラサラ
 ントス且ツヤ武市小楯等ノ輩久シク牢獄ニ冤
 ナ吞ム臣等亦タ深ク恐悚ニ堪ヘサル也夫レ小
 楯等以下不敏ト雖モ苟モ尊攘ノ大義ヲ守リ力
 ナ國家ニ尽スモノタルハ後世ヲ俟タスシテ知
 ルヘキナリ加フルニ彼等頗ル老侯ノ眷顧ヲ辱
 フシ藩務ニ黽勉セシモノ唯願クハ正邪ノ分ヲ
 明ニシ非常寛大ノ典ニ處セラレシト若シ然

ラサレハ節義ヲ重スルノ士等必ス藩廳ヲ怨望
シ政令是ヨリ行ハレサルニ至ラン臣等既ニ茲
ニ慨スル所アリ曩ニ數々書ヲ捧ケ縷陳スル所
アリト雖モ省セラレス今也非常ノ時勢宜シク
非常ノ英斷ヲ發シ尊攘ノ主旨ヲ達シ以テ大義
首唱ノ國名ニ背カサランコトヲ望ム聞クカ如
キハ頃日外艦長州ニ襲來セントスルノ勢アリ
是ニ於テカ諸藩應援ノ兵ヲ出サンコトヲ謀リ
既ニ因備ノ有志輩等團結兵ヲナシ以テ其期ヲ
待ツト我藩モ亦宜シク速ニ令ヲ下シ精兵ヲ徵
集シ事ニ臨テ踟躇ノ憂ナカラシムヘシ臣等徵

賤ト雖モ國恩ヲ負荷スルコト山ノ如ク海ノ如
シ之レヲ報スルハ只主公馬前ノ一死ヲ期スル
而已憂國ノ衷情止ム能ハス茲ニ復タ一書ヲ捧
ク僭踰ノ罪ヲ許シ國是一定非常ノ表示ヲ賜ハ
ランコトヲ伏シテ歎願ス云々書目附所ニ達ス
省セス成章等嘯集叛ヲ謀ルト爲シ吏卒數百ヲ
遣テ捕縛セシム成章等議シテ曰ク余輩ノ茲ニ
集會スル所以ノモノハ敢テ暴舉ヲ謀ルニアラ
ス只其心ヲ同シ力ヲ協セ建言以テ時弊ヲ矯正
セント欲スル而已然ルニ今ヤ藩廳目スルニ叛
人ヲ以テシ吏卒數百ヲシテ我儕ヲ捕縛セント

紫瀾云何
物獄吏亡
狀乃然。

スト若シ曠日彌久其來襲ニ逢ハ、一戰ヲ試ミ
サルヲ得ス是レ豈ニ我儕ノ本旨ナランヤ如カ
ス一旦相ヒ卒テ陸路大坂ニ到リ其銳ヲ避ケ以
テ前途ノ事ヲ謀ラシニハト乃チ相ヒ携テ徐々
國境ヲ過キ阿州ニ入ル路塞テ通セス應接日ヲ
移ス吏卒等追躡シ至ル遂ニ其遁ルベカラサル
ヲ知リ同盟二十三人從容縛ニ就ク元治元年甲
子九月五日郡中奈半利磧ニ斬セララル刑ニ臨ミ
朗吟シテ日ク嗟呼男子甘鼎鑊ト言未タ畢ラス
頭已ニ墜ツ田野村福典寺境内ニ合葬ス成章死
スル年三十二

述懷

敷島ノ道タトト淺茅生ニ露ノアシタヤ旭
サストラム、

書自持扇面

虎。出。山。來。龍。躍。淵。中。原。何。日。至。回。天。慷。慨。終。死。漢
三傑。安。逸。奚。爲。晉。七賢。俟。命。只。順。隨。信。義。全。身。非
敢。計。吾。便。無。功。空。濺。多。年。淚。幸。賜。慈。仁。經。典。憐。
清岡正道通稱ハ治之助曲水ト號ス成章ト同姓
郷士丈五郎保定ノ長男世々安藝郡中山郷ニ居
ル正道文政九年丙戌正月二日ヲ以テ家ニ生ル
稟性温順ニシテ義ヲ重ス夙ニ國運ノ衰頹ヲ憂

日 攷々周旋ス文久二年壬戌六月藩命ヲ以テ京
ニ上ル此歲勅使姉小路卿ノ東下ニ從フ後ヲ成
章ト俱ニ屢々藩廳ニ建言シ時弊ヲ論ス事敗レ
斬セララル死スル年三十九

天皇ノ勅モチテ青蓮院ノ宮ヨリ菊ノ花
給リケルトキ讀ル

カシユシヤイトモ畏キ大宮ノ深キ惠ヲ菊ノ
シヲ露、

無題

碎ケテハ仇シ光モ留メマシ、蓮ニヤトル露ノ
シヲ玉、

短刀ニ彫付ケシ歌ニ

玉鋒ノ道ヲ分ケ行武士ノ、ヤマト心ハ折レヌ
マカラズ、

阿州ヨリ歸ルトキ

ウツヤスノウツヲ安キヨニアヒナカラ。ウツヤ
スカラヌ。ワカレナソスル。

俳句

蒼海ニ暑シツミテ月夜カナ
其誠石ニシミイル寒サカナ

絶命詞

生爲皇國民。死爲皇國神。

身ハ國ニ心ハ阿波ニ止リテ靈ノ柱撓ムヘキ
カハ

安岡忠房鑊馬ト稱ス安藝郡馬上村ノ里正忠郷
ノ三男ナリ幼ヨリ好テ書ヲ讀ミ人ノ爲メニ感
賞セラル後テ本郡田野郡府ノ學館ニ入り業日
ニ進ム遂ニ擧ケラレテ教授官トナリ祿若干ヲ
賜フ死スル年十有九

阿州ニアリテ

鳴蟲ノ哀ハ毎ニ故郷ノ淺茅ノ露ニフリシキ
ルナリ

寺尾良利權平ト稱ス橘氏安藝郡安藝浦郷士善

之進ノ長男ナリ少ヨリ志文武ニ在リ藩士谷臺
八ニ從テ擊劍ヲ學ヒ鳴村有慶ニ從テ書ヲ讀ム
皆ナ得ル所アリ死スル年二十四

阿州ニアリテ

身ハ終ニ如何ニ鳴門ノ汐ナラテ、動ク心ヲ哀
レトハミヨ、

横山正利初メ安之助ト稱シ後テ英吉ト改ム浪
士源七ノ長男天保十二年辛丑六月廿八日ヲ以
テ安藝郡下山村ニ生ル安政某年擧ケラレテ輕
士トナリ祿若干ヲ賜フ刑ニ臨ミ口吟シテ日ク
諸人ノ惜ム命モ云々言未タ畢ラザルニ斬セラ

ル死スル年二十四

述 懷

海山モ及ヌ恩ト情ニハ、忘レモ尽ヌカヘルサ
ノ道、

小川好雄通稱ハ官次性ハ平氏安藝郡嶋村ノ里
正重次郎ノ次男ナリ安政六年己未冬輕士ノ列
ニ舉ケラレ祿若干ヲ賜フ死スル年二十一
木下秀定通稱ハ庫之助後ナ嘉久次ト改ム杉谷
ト号ス父ハ總九郎定行世々阿土ノ國境野根山
岩佐關ノ番長タリ父ニ代テ其職ニ在リ死スル
年二十一

述 懷

イヘハ身ノ爲ニモナラズ思フ事、イハテ別ル
、トノカナシキ。

辭 世

カ、ルトキ何カ命ノ惜カラム、死テ御國ノ爲
ト思ヘバ、

彝正ハ秀定ノ弟ナリ初メ幾次ト稱シ後ナ慎之
助ト稱ス死スル年十六

死ニ臨テ辭世口吟

死スルトモ命ハ何カ惜カラム、世ノ爲メ君ノ
爲メト思ヘバ、

須賀義氏通稱ハ恒次姓ハ源氏安藝郡安藝浦ノ
農民庄右衛門ノ長男ナリ義氏少フシテ文武ヲ
好ミ本郡ノ人島村有慶岩崎馬之助等ニ從テ文
學ヲ勵ミ藩士田所左右次ニ就テ砲術ヲ學ブ死
スル年三十
柏原信郷幼名ハ留吉後チ玄碩ト稱シ省三ト改
ム父ハ太喜次天保六年乙未三月五日安藝郡安
田村ニ生ル人ト爲リ溫柔閑雅容貌婦人ノ如シ
而シテ性剛強甚ク擊劍ヲ好ム後チ醫學ニ志シ大
阪ニ之キ緒方郁藏ノ門ニ遊フ安政六年己未某
月郡府ノ傭醫ニ舉ケラル文久元年辛酉長崎ニ

至リ二宮恕山ニ從テ業ヲ修メ後チ又々外醫ボ
ードインニ從學シ頗ル發明スル所アリト云フ
死スル年三十
豐永方銃初メ音馬ト稱シ後チ斧馬ト改ム安田
村ノ農人彌三郎ノ次男ナリ万延元年庚申某月
農兵ニ舉ケラル文久二年壬戌江戸ニ至リ老侯
容堂ヲ護衛ス乃チ五十人組ノ一人ナリ死スル
年二十有七

辭世

露ノゴト消ル命ハ惜シカラテ、惜ムハ後ノ名
ノミナリケリ、

千屋孝樹俗稱ハ熊太郎其姓ハ菅原氏安藝郡和
食村ノ里正清助ノ長男ナリ醫學ニ志シ万延元
年庚申四月大坂ニ至リ某氏ノ門ニ遊フ後十國
ニ歸リ業ヲ家ニ開ク治ヲ乞フ者陸續相踵ク死
スル年二十一

辭世

花サカテ身ハ朽ルトモ大丈夫ノ真魂止テ國
ハ穢サシ、

柏原義勝幼名ハ次太郎禎吉ト改ム郷士義勝ノ
長男世々安藝郡安田村ニ居ル文久二年壬戌六
月老候豊信ニ從テ京ニ上ル同年十月勅使三條

實美ヲ奉シテ關東ニ行ク十二月京ニ歸ル公徽
章ノ禮服ヲ賜フ三年癸亥二月藩主豊範ニ扈シ
テ國ニ歸ル是歲三月農兵ノ長ト爲ル死スル年
二十有七
岡松正直惠之助ト稱ス浪士平五郎ノ次男劍砲
ノ術ヲ善クシ傍ヲ好テ史書ヲ讀ム死スル年三
十

辭世

君ノ爲メ身ハ無キカマト捨ルトモ末清カラ
ム神ノ惠ニ、

近藤爲美幼名ハ龜彌後十次郎太郎ト稱ス川口

頑五郎ノ三男ニシテ安藝郡西嶋村里正恒太ノ
養子ト爲リ養父ニ代テ職ヲ務ム後テ江戸ニ至
リ老侯豊信ヲ護衛シ頗ル眷顧ヲ辱フス亦々五
十人組ノ一人ナリ死スル年二十又五

述 懷

古郷へ歸ル錦ハ秋深ク、染ムル紅葉ノ心ナリ
ケリ

辭 世

君カ爲メ尽ス誠ハイタツラニ、我トアシタノ
露ト消ヌル、

宮田節齋ハ吾川郡弘岡村ノ農民ナリ幼ヨリ文

事ヲ好ム又々某氏ニ從テ醫ヲ學フ嘉永二年乙
酉高岡郡蓮池村正覺寺ノ住職ト爲リ大圓ト号
ス安政三年丙辰職ヲ失シ安藝郡伊尾水村ニ逐
ル是ニ於テ安田村ノ醫官田謙次ニ從テ勵精益
々醫學ヲ修メ傍ラ漢籍ヲ讀ム同六年己未八月
罪ヲ免サル即チ業ヲ長岡郡大津村ニ開ク後チ
謙次ノ養子トナリ其業ヲ繼ク死スル年二十又
七

安藝郡北川郷平民新井義正ハ竹次郎ト稱シ竹
莊ト号ス藩人北川直來ノ次男ナリ義正幼ヨリ
學ヲ好ミ遊學ニ志アリト雖モ家貧ニシテ資ニ

乏シ故ヲ以テ藩士某ニ僕從シ京攝ノ間ニ往來
シ傍ヲ閑ヲ偷ヲ刻苦書ヲ讀ム文久二年壬戌伯
父林左衛門ナル者死ス子ナシ即チ其後ヲ續キ
北川郷ノ里正ト爲ル蓋シ素志ニアラサルナリ
後チ數々藩廳ニ請ヒ職ヲ解キ以テ他邦ニ遊學
セント欲スト雖モ遂ニ允可ヲ得ス野根山ノ事
敗レ遂ニ斬セララル年二十六義正又々好テ詩ヲ
善クス

過八坂八濱有感

一途空志奈無功。木落始驚秋已中。危險經來知
幾許。又逢八坂八濱風。

題義貞戰死圖。

東征西伐立功初。若不失機雄有餘。誰識中心未
灰處。死時猶帶錦囊書。

尋梅

隔村溪磡雪威加。不辨梅花與雪花。一陳那邊香
撲鼻。始知半面是梅花。

田中維清モ亦々安藝郡吉良川村ノ里正ナリ幼
名ハ馬之助取吉ト改ム亦々學ヲ好ミ藩人岩崎
馬之助ニ從學ス後チ江戸ニ行キ鹽屋周助ノ門
ニ遊ブ其際交ル所皆チ當時奇節ノ才人ナリ死
スル年二十又二

在阿波將歸國賦以答田井志方紅露嚴之
諸君二首錄一

枕上蟲聲伴苦吟。夢成忠憤夜沉沉。此身今日爲
君盡。未盡神州男子心。

臨刑一句

哀願不聞吾事畢。

檜垣正休繁太郎ト稱ス安藝郡羽根村住人俊藏
ノ長男死スル年十六

辭世

花ツホミ峯ノ嵐ノハケシキニ、聞モ淋シキ秋
ノ夜ノ月、

吉本元枝俗稱ハ培助父ハ達枝安藝郡田野村ノ
里正ナリ天保十五年甲辰五月七日高岡郡宇佐
村ニ生ル死スル年二十一

阿州ニアリテ

ユノ程ノ君カ情ハ阿波ノ海ノ、アハアハ筆ニ
カキモヤラレス、

官地利涉孫市ト稱ス藩士孫作ノ長男ナリ文久
二年壬戌輕士ノ列ニ擧ケラレ職ニ安藝郡府ニ
在リ利涉曾テ武技ヲ好ミ劔砲ノ術ヲ精練ス死
スル年十有九

官田能格賴吉ト稱ス橘氏藩士善左衛門ノ次男

ナリ曾テ武市小楯ニ從テ擊劍ヲ學フ文久二年
壬戌小楯ニ隨テ江戸ニ遊ヒ諸藩ノ義徒ニ知ラ
ル明年癸亥國ニ歸ル死スル年三十
川島某總次ト稱ス父ハ七五郎世々野根山岩佐
關ノ番卒タリ元治元年甲子父ニ代テ職ヲ務ム
死スル年詳ナラズ

海南義烈傳三篇 大尾

三篇正誤

第六葉裏第五行
第九葉表第七行
第十葉表第十一行
第十一葉表第十四行
第廿葉裏第七行
第廿二葉裏第八行
第廿七葉表第五行

重儉ハ重險ノ誤
中頃ハ中ゴロノ誤
賦近ハ賦近ノ誤
幼名ヲハ幼名ハノ誤
同志ノ志ハ同志ノ士ノ誤
其常ニハ某常ニノ誤
慷慨ハ慨慷ノ誤

丙戌四書 龍東狂士楷談

明治十五年一月十七日 出版及權願

全 年二月十三日 版權免許

全 年二月 發兌

定價並貳拾錢

編輯人

高知縣士族
京都府二等屬
土居通謙

高知縣土佐郡石井村四十三番地
同居當時京都府下上京區第廿二
組上生洲町貳百拾七番地寄留

京都府平民

出版人

中西嘉助

上京區第廿七組神塚町
廿六番地

京都府御用

印刷

小川活版所

全圖

67
3
64

